

## オーストラリア中等学校生の学力意識に関する研究

### 一日・豪比較も含めての考察

Australian high school students' consciousness of their own English abilities

- Including a comparative study of Australian and Japanese high school students -

キーワード：形成的評価、過大評価、過小評価

内 藤 徹

Naito Toru

#### 1. はじめに

形成的評価の重要性が強調されているが、その中で自己評価も大切な評価の一つである。しかし、学習者の過大評価や過小評価など問題点もある。このような中において、学習者の自己評価についての意識の傾向を知ることは、教授者にとって必要なことであると思われる。そして、この意識は、個人によって異なるが、男女間にも差があるだろうと推測できる。

前回、中部地区英語教育学会紀要29では、日本人高校生の自己評価について考察をした。今回、オーストラリア滞在中に得たデータによって、その中等学校生の意識を分析してみた。この日・豪比較は、教授者にとっても必要なことであると思われる。この小論が、指導や評価の一助になれば幸いである。

#### 2. 実験研究

##### 2. 1 目的および文献

オーストラリアの学習者に「クラスの中で、自分の英語（または、日本語）の学力は、5段階のどこに位置すると思うか」というアンケート形式の調査をすることにより、実際の学力（学習成績）の段階とアンケートの段階とを比較する。すなわち、自分の学力を過大評価しているか、過小評価しているか、または、適切に評価しているかについて明らかにしたい。また、男女間にその評価の差があるのかどうかについても調べたい。〔アンケート用紙については、資料参照〕

これらのことについて、Underhill(1989)は次のように述べている。

A history of unspectacular and unenjoyable academic achievement will probably lead the learner to underestimate his abilities. Women in general will often rate themselves lower than men when they are, in fact, at least as good; similarly, older learners will often rate themselves lower than younger learners.

また、内藤(1999)は日本人高校生を被験者として、次のことを明らかにしている。

普通科の高校生は

- 1) 受験勉強という特殊な環境に置かれるため、劣等感を持つ場合が多く、自分の学力を過小評価している。
- 2) 一般的に、女子は男子と比べて、自分の学力を過小評価する傾向がある。

##### 2. 2 仮説

- 1) 過酷な受験競争がある日本人の学習者と違って、自分の学力を過大評価する傾向がある。
- 2) 日本人学習者にも見られたように、女子は男子と比べて、自分の学力を過小評価する傾向がある
- 3) 年少者は年長者と比べて、自分の学力を過大評価する傾向がある。

## 2. 3 実施時期と被験者

平成10年8月、 延べ102名

被験者内訳： RYAN CATHOLIC COMMUNITY SCHOOL 8、9、10、11、12年生

## 2. 4 分析方法

t-TEST [平均の有意差検定]、標準偏差、平均、など

2. 5 結果および分析 [意識＝生徒の自分の学力意識、実際＝生徒の実際の成績：各々の段階における数字は人数を表す、合計＝ $\Sigma$ （段階×その人数）：高い段階の人数が多いと合計が大きくなる]

### 母国語（英語）クラス

TABLE 1 (8年生の「意識」と「実際」の各段階の人数と t 検定)

全体 (N=21)			男子 (N=8)			女子 (N=13)		
段階	意識	実際	段階	意識	実際	段階	意識	実際
5	2	2	5	0	0	5	2	2
4	9	5	4	3	2	4	6	3
3	10	7	3	5	1	3	5	6
2	0	5	2	0	3	2	0	2
1	0	2	1	0	2	1	0	0
TOTAL 76 63			TOTAL 27 19			TOTAL 49 44		
MEAN 3.62 3.00			MEAN 3.38 2.38			MEAN 3.77 3.38		
SD 0.65 1.11			SD 0.48 1.11			SD 0.70 0.92		
t=2.156 df=31			t=2.188 df=8			t=1.169 df=24		
*p<0.04			*p<0.07			p<0.3		

TABLE 2 (9年生の「意識」と「実際」の各段階の人数と t 検定)

全体 (N=17)			男子 (N=10)			女子 (N=7)		
段階	意識	実際	段階	意識	実際	段階	意識	実際
5	0	1	5	0	1	5	0	0
4	11	5	4	8	3	4	3	2
3	6	6	3	2	4	3	4	2
2	0	4	2	0	2	2	0	2
1	0	1	1	0	0	1	0	1
TOTAL 62 52			TOTAL 38 33			TOTAL 24 19		
MEAN 3.65 3.06			MEAN 3.80 3.30			MEAN 3.43 2.71		
SD 1.48 0.85			SD 0.40 0.90			SD 0.49 1.03		
t=2.418 df=24			t=1.523 df=11			t=1.516 df=8		
*p<0.03			p<0.2			p<0.2		

TABLE 3 (10年生の「意識」と「実際」の各段階の人数と t 検定)

全体 (N=16)			男子 (N=8)			女子 (N=8)		
段階	意識	実際	段階	意識	実際	段階	意識	実際
5	2	1	5	2	1	5	0	0
4	10	4	4	4	2	4	6	3

3	3	6
2	1	1
1	0	1
-----		
TOTAL	61	48
MEAN	3.81	3.00
SD	0.73	1.00
-----		
t=2.534		df=30
*p<0.02		

3	1	3
2	1	2
1	0	0
-----		
TOTAL	31	26
MEAN	3.88	3.25
SD	0.93	0.97
-----		
t=1.181		df=14
p<0.3		

3	2	3
2	0	2
1	0	0
-----		
TOTAL	30	25
MEAN	3.75	3.13
SD	0.43	0.78
-----		
t=2.079		df=14
+p<0.09		

TABLE 4 (11年生の「意識」と「実際」の各段階の人数とt検定)

全体 (N=14)			男子 (N=4)			女子 (N=10)		
段階	意識	実際	段階	意識	実際	段階	意識	実際
5	0	1	5	0	1	5	0	0
4	4	4	4	2	1	4	2	3
3	9	5	3	1	2	3	8	3
2	1	3	2	1	0	2	0	3
1	0	1	1	0	0	1	0	1
-----			-----			-----		
TOTAL	45	43	TOTAL	13	15	TOTAL	32	28
MEAN	3.21	3.07	MEAN	3.25	3.75	MEAN	3.20	2.80
SD	0.56	1.03	SD	0.83	0.83	SD	0.40	0.98
-----			-----			-----		
t=0.431		df=19	t=0.738		df=6	t=1.134		df=11
p<0.7			p<0.5			p<0.3		

TABLE 5 (12年生の「意識」と「実際」の各段階の人数とt検定)

全体 (N=15)			男子 (N=7)			女子 (N=8)		
段階	意識	実際	段階	意識	実際	段階	意識	実際
5	0	1	5	0	0	5	0	0
4	9	4	4	4	2	4	5	3
3	5	6	3	2	3	3	3	3
2	0	4	2	0	2	2	0	2
1	1	0	1	1	0	1	0	0
-----			-----			-----		
TOTAL	52	47	TOTAL	23	21	TOTAL	29	25
MEAN	3.47	3.13	MEAN	3.29	3.00	MEAN	3.63	3.13
SD	0.81	0.88	SD	1.03	1.25	SD	0.48	0.66
-----			-----			-----		
t=1.064		df=28	t=0.439		df=12	t=1.621		df=14
p<0.3			p<0.7			p<0.2		

#### 外国語（日本語）クラス

TABLE 6 (10年生の「意識」と「実際」の各段階の人数とt検定)

全体 (N=12)		
段階	意識	実際
5	1	1
4	3	3
3	5	4
2	3	3
1	0	1
-----		
TOTAL	38	36
MEAN	3.17	3.00
SD	0.90	1.08
-----		
t=0.401		df=22
p<0.7		

全員が女子である。  
従って、男女の違いは述べられない。

TABLE 7 (12年生の「意識」と「実際」の各段階の人数とt検定)

全体 (N=7)			男子 (N=2)			女子 (N=5)		
段階	意識	実際	段階	意識	実際	段階	意識	実際
5	0	1	5	0	1	5	0	0
4	2	2	4	1	0	4	1	2
3	4	2	3	0	0	3	4	2
2	1	1	2	1	1	2	0	0
1	0	1	1	0	0	1	0	1
TOTAL	22	22	TOTAL	6	7	TOTAL	16	15
MEAN	3.14	3.14	MEAN	3.00	3.50	MEAN	3.20	3.00
SD	0.64	1.25	SD	1.00	1.50	SD	0.40	1.10
t=0.000 df=12 p<1			t=0.277 df=2 p<0.9			t=0.342 df=4 p<0.8		

## 2. 6 考察

母国語（英語）のクラスについて述べよう。8年生のクラス全体(N=21)では学習者の意識の平均は 3.62 で、実際の成績の平均は 3.00 である。t 検定の結果 4% 水準で有意差がある。男子(N=8)は、学習者の意識の平均は 3.38 で、実際の成績の平均は 2.38 である。t 検定の結果、差の傾向は見られるが、統計上の有意差は見られない。女子(N=13)は、学習者の意識の平均は 3.77 で、実際の成績の平均は 3.38 である。t 検定では有意差は見られない。[TABLE 1]

9年生のクラス全体(N=17)では学習者の意識の平均は 3.65 で、実際の成績の平均は 3.06 である。t 検定の結果 3% 水準で有意差がある。男子(N=10)は、学習者の意識の平均は 3.80 で、実際の成績の平均は 3.30 である。t 検定の結果、有意差は見られない。女子(N=7)は、学習者の意識の平均は 3.43 で、実際の成績の平均は 2.71 である。t 検定では有意差は見られない。[TABLE 2]

10年生のクラス全体(N=16)では学習者の意識の平均は 3.81 で、実際の成績の平均は 3.00 である。t 検定の結果 2% 水準で有意差がある。男子(N=8)は、学習者の意識の平均は 3.88 で、実際の成績の平均は 3.25 である。t 検定の結果、有意差は見られない。女子(N=8)は、学習者の意識の平均は 3.75 で、実際の成績の平均は 3.13 である。t 検定では差の傾向は見られるが、統計上の有意差は見られない。[TABLE 3]

11年生のクラス全体(N=14)では学習者の意識の平均は 3.21 で、実際の成績の平均は 3.07 である。t 検定の結果、有意差は見られない。男子(N=4)は、学習者の意識の平均は 3.25 で、実際の成績の平均は 3.75 である。t 検定の結果、有意差は見られない。女子(N=10)は、学習者の意識の平均は 3.20 で、実際の成績の平均は 2.80 である。t 検定では有意差は見られない。[TABLE 4]

12年生のクラス全体(N=15)では学習者の意識の平均は 3.47 で、実際の成績の平均は 3.13 である。t 検定の結果、有意差は見られない。男子(N=7)は、学習者の意識の平均は 3.29 で、実際の成績の平均は 3.00 である。t 検定の結果、有意差は見られない。女子(N=8)は、学習者の意識の平均は 3.63 で、実際の成績の平均は 3.13 である。t 検定では有意差は見られない。[TABLE 5]

従って、母国語（英語）においては、年少の8、9、10年生において、自分の学力を過大に評価しているが、年長の11、12年生においては、若干過大に評価はしているが、有意差は見られず、自分の成績の位置をかなり正確に把握していると言えよう。男女については有意差がなく、違いは見

られない。

次に、外国語（日本語）のクラスについて述べよう。10年生のクラス全体(N=12)では学習者の意識の平均は 3.17 で、実際の成績の平均は 3.00 である。t 検定の結果、有意差は見られない。このクラスは全て女子である。[TABLE 6]

12年生のクラス全体(N=7)では学習者の意識の平均は 3.14 で、実際の成績の平均は 3.14 である。t 検定の結果、全く有意差は見られない。男子(N=2)は、学習者の意識の平均は 3.00 で、実際の成績の平均は 3.50 である。t 検定の結果、有意差は見られない。女子(N=5)は、学習者の意識の平均は 3.20 で、実際の成績の平均は 3.00 である。t 検定では有意差は見られない [TABLE 7]

従って、外国語（日本語）のクラスにおいては、有意差は見られず、自分の成績の位置をかなり正確に把握していると言えよう。男女については、データも少ないが有意差はなく、違いは見られない。

それでは仮説の検証である。仮説1「過酷な受験競争がある日本人の学習者と違って、自分の学力を過大評価する傾向がある」は、全体的にその傾向が見られるが、特に年少学年である8、9、10年生は自分の学力を過大に評価している。従って、母国語（英語）のクラスにおける年少学年の学習者においては仮説は支持されているが、年長学年の学習者には必ずしも支持されているとは言えない。仮説2「日本人学習者にも見られたように、女子は男子と比べて、自分の学力を過小評価する傾向がある」は、8年生についてはそういう傾向も見られるが、その他の学年においては、女子は男子と比べて、学年が上がるにつれて、むしろ過大評価する傾向が見られ、支持されたとは言えない。仮説3「年少者は年長者と比べて、自分の学力を過大評価する傾向がある」は、データにより、年少学年の学習者は年長学年の学習者と比べて過大評価をしていると言えるので、これは支持されたことになる。

### 3. おわりに

日本人学習者と比べて、オーストラリア人学習者は、その国民性から、かなり自分の学力を過大評価するであろうと考えていた。これは、私がデータを得た RYAN CATHOLIC COMMUNITY SCHOOL の年少学年生（8、9、10年生）については正しいと言えるが、年長学年生（11、12年生）については必ずしもそうは言えないということがわかった。これは、学年が上がると年齢的に、自分の学力の位置がかなりわかるようになるということと、オーストラリアにおいても大学入学は STANDARDIZED GRADE 12 TEST と O.P. (OVERALL POSITION) によって決定されるということによるのかもしれない。日本のような入学試験ではないにしても、このような学力試験や評価があると学習者は自分の位置を気にするものであり、また、自分の学力もわかってくるということであろう。

（福井県立 鯖江高等学校）

引用文献：

- Brown, H. Douglas. 1980. *Principles of Language Learning and Teaching*. Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, N.J.
- Hatch, Evelyn & Hossein Farhady. 1982. *Research Design and Statistics for Applied Linguistics*. Newbury House Publishers Inc. pp.80-94, pp.108-121, pp.165-171, pp.192-211, pp.247-249
- Larsen-Freeman, Diane & Michael H. Long. 1992. *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. Longman Group Limited
- 内藤 徹 1996. 『新しい 英語教育ハンドブック』 リーベル出版 pp.17-37
- 内藤 徹 1999. 「高校生の学力意識に関する研究 ―生徒全体の傾向と男女の差について―」 『中部地区英語教育学会 紀要』第29号 pp.365-370
- Richards, Jack *et. al* 1985. *Longman Dictionary of Applied Linguistics*. Longman Group Limited.
- Underhill, Nic 1989. *Testing Spoken Language: A handbook of oral testing techniques* p.23 Cambridge University Press.

資料：アンケート用紙

\_\_\_\_grade\_\_\_\_class No.\_\_\_\_Name\_\_\_\_\_

Please indicate the level which best describes your English ability in this class.

- (5) Upper
- (4) Upper middle
- (3) Middle
- (2) Lower middle
- (1) Low

